IB を通じたサービスラーニングの発達

2020年4月13日投稿、トピック: Creativity, activity, service (CAS) (創造性・活動・奉仕), Diploma Programme (DP) (ディプロマプログラム), Inspiring alumni (卒業生紹介), Middle Years Programme (MYP) (中等教育プログラム)

ディプロマプログラム (DP: Diploma Programme) の卒業生で現在は母校インターナショナル・アカデミーで IB 教員を務めるサラ・クランシーさんが、中等教育プログラム

(MYP: Middle Years Programme) と DP にサービスラーニング (奉仕活動を通じた学習) がどう統合されているかを振り返りました。「卒業生の声」シリーズへの寄稿は、今回が 初めてです。



著:サラ・クランシー i 💆 🖸

「MYP と DP の一貫教育の体験を通じて、生徒と教師が得ることができる指導と学習の機会の多さに驚かされました。」

私は MYP と DP の文学のコースを何年も教えてきましたが、IB の一貫教育については限定的にしか理解していませんでした。それは主に、やるべきことに追われていたからです。 年齢相応の楽しい学習活動をつくりだすこと、成長のための形成的な機会を設けること、 総括的評価の成績をつけること、模擬試験にフィードバックを提供すること、それに自分が受け持つ 150 人以上の生徒の心身の健康に気を配ることなど、日々多忙をきわめていました。一貫教育への理解を深めることができたのは、教師としての役割を離れた時でした。9~12 年生の生徒を擁する完全な IB ディプロマ校の責任者となったことで、プログラムのコア要素がありとあらゆる形で IB の生徒の成長を支えていることがわかるようになりました。この視野を得たことで、MYP と DP の一貫教育の体験を通じて、生徒と教師が得ることができる指導と学習の機会の多さに驚かされました。

今後3回にわたって、IB卒業生兼教員としての立場から、MYPの「パーソナルプロジェクト」、DPの「課題論文(EE:extended essay)」、DPの「創造性・活動・奉仕(CAS:creativity, activity, service)」というコア要素が、創造的かつ批判的に考えることができ、思いやりをもった人を育てるという IBの使命とどのようにつながるかをお話したいと思います。この記事の最初の草稿は、新型コロナウイルスの大流行が日常生活の一部になる前に書きましたが、リモート学習になった今、新たな方法でこれらのプロジェクトについて考えるよう、引き続き生徒に働きかけています。というわけで、生徒が教室にいても自宅にいても、ここで紹介するアイデアが学習の支えになると感じていただければ嬉しいです。今まで以上に課題や活動を生徒の関心に結びつけ、教室では実施が難しくても今の時間的・空間的文脈にはぴったりな活動を見つける一助になればと思います。

まず最初に、「パーソナルプロジェクト」は MYP の第 5 年次に行われます。詳しくは、IB 資料 『「パーソナルプロジェクト」指導の手引き』を参照してください。

パーソナルプロジェクトを完成させる生徒は、毎年 400 人近くに上っています。プロジェクトの複雑さ、取り組みの度合い、要求される知的レベルは、ご想像の通り生徒によって大きく異なります。自分で本当に興味のあることを見つけて意欲的に深く探究する生徒は、プロジェクトの計画、実施、振り返りという課題を期待どおりこなす傾向にあります。でも、自分や自分のコミュニティーにとって何が重要かを考えさせるには、どうすればよいのでしょうか。生徒が自主的に取り組み、学習で得たスキルを活用でき、創造的または実践的な成果として表現できるようなプロジェクトは、どうすれば生みだせるのでしょうか。

3つのアイデアをご紹介します。

1. 自己診断表をつくってみる。

学年の初めに、自己診断表を使って生徒に以下の質問に答えてもらいました。

- 興味:私が学習したいこと、考えるのが好きなことは....
- スキル・才能:私ができることは....
- 成長できる部分:私が身につけたいこと、向上させたいことは...
- 人を助ける:誰かを助けた経験について説明してください。
- 人から助けられる:誰かに助けられた経験について説明してください。

この自己診断表を使うことで、私たちが生徒の探究の時間を重視していることを示すことができます。また、自分が何を学びたいか、特に自分が何を楽しいと思うか、どのような部分で成長したいと思うか、それらを通じてどのように人の役に立つことができるかについて考えてもらうことができます。また、上記の最後の項目の意図は、誰かが自分に教えてくれたこと、自分のためにしてくれたことを、どうすれば他の人にしてあげられるについて考えさせることにあります。「あなたという人間を大切に思っています。このパーソナルプロジェクトは、『あなたらしさ』を示す機会です」と、暗に伝えたいのです。教育者のウィリアム・デーモン氏は、著書『The Path to Purpose(目的への道)』で目的を追求することの重要性を説き、「若者たちに直接的な人生経験をさせることは、楽観的な考え方を培い、自信を育てることにつながる」と述べています。生徒たちが得意なこと、興味があること、コミュニティーに貢献できる(し続けられる)ことを土台とし、その上に積み重ねていくプロセスを通して、生徒の能力を支えるだけでなく、さらなる探究に挑戦させることができます。

注:スキルと才能の違いについてはよく話題になります。私の場合、見知らぬ人との世間話を例にして説明しています。私にとって世間話は、できないことはないけど努力が必要、つまり、これは時間をかけて身につけたスキルであって天性の能力(才能)ではないということになります。

2. 「行動としての奉仕活動」に結びつける

キャシー・バーガー・ケイ氏は、著書『The Complete Guide to Service Learning(サービスラ ーニングの完全ガイド)』で、「サービスラーニングは、学校での学習を、若い人たちが 世界に対して本来的にもっている思いやりや心配する気持ちに結びつける」と説明してい ます。学習内容と生徒の興味、それにこの本来的な思いやりと心配する気持ちをつなげる ための空間を意図的につくることで、行動、アドボカシー、リサーチという形でコミュニ ティーに奉仕する活動が重視されていることを、生徒は理解するようになります。また、 パーソナルプロジェクトを通じてスキルを学習する間に、責任あるグローバル市民として の自分の役割を知ることができます。自分のコミュニティーに有意義に貢献することが、 パーソナルプロジェクトの要件として課されているわけではありません。しかし私の学校 では、2つの理由からこのような方向性を奨励しています。第一に、生徒のプロジェクト をグローバルな文脈にしっかりと位置づけられるようになり、特定のトピックや課題、問 題の探究に豊かさがもたらされます。第二に、より良い、より平和な世界を築くことに貢 献する人を育てるというIBの使命とより深く一致させることができます。MYPの生徒と しての体験を通して、「行動としての奉仕活動」が学習分野における知識と理解につなが ります。パーソナルプロジェクトは、責任ある行動についての生徒の理解を高め、自分の 興味、スキル、知識を奉仕活動に活かすための力をもたらすことができます。

3.パーソナルプロジェクトを文脈のなかで理解する

DPのEEとCASは、パーソナルプロジェクトから得る学びの自然な延長線上にあるものです。パーソナルプロジェクトは、トピックや体験の選択を支え、リサーチスキル、思考スキル、自己管理スキルを発達させ、リスクを冒したり、自分の興味のあることに取り組む機会をもたらします。この事実を考えると、生涯学習者を育てるだけでなく、DPの「コア」で要求される確固たる基礎をつくるうえでも、パーソナルプロジェクトがいかに重要かがわかります。一貫教育校ではない場合でも、サービスラーニングを大学出願時に書く小論文に結びつけることで、生徒は「コア」がもつ意義を理解することができます。「やらなきゃいけないからやる」のではなく、時間と労力をかけて取り組む体験が最終的には学ぶ喜びや成長する喜びをもたらすのだということを、指導者やメンターの力を借りながら気づくようになるでしょう。



サラ・クランシー:米国ミシガン州ブルームフィールド・ヒルズにあるインターナショナル・アカデミーの卒業生。カラマズー・カレッジで英語とドイツ語を専攻し、教育学修士課程および修復的実践法修士課程修了。2009年から母校で MYP と DP の文学を教えはじめ、現在はサービスラーニングと CAS のコーディネーターを務める。趣味は小説を読むこと、ヨガ、ビーチで過ごすこと。